
咎人呪殺

夢幻

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咎人呪殺

【Nコード】

N4182Z

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

昔々、罪を犯し、呪いをかけられた12人がいた、だが、12人はその呪いを拒み、子孫へ受け継がせた。これは、その子孫たちの殺し合いの話である…。

超がつくほど、駄作です。

序章

「空から、何か降ってこないかなあ。」

(……、なんて言ってみただけ、そんなこと、有るわけ無いか！)

ボコッ

「ん？」

ボコボコッ

「な、なにこれええ！」

(空からなにか降ってこないかって言ってみただけ、地面の中から女の子が出てくるものなの！？)

「貴方は、誰？」

「ちよっと待って、あなたこそ誰。突然、地面から出てきて。」

「申し遅れました。私の名前は、クリアス＝マーガトロイドと言います、あなたは？」

「櫻宮 雅^{みやび}^{ちん}ただ、クリアスさんはいい加減、体を地面から出したら、どうですか？首しか出てないんですから。」

「そうですね、ちよっと待ってください。よっこいしょ！」ボコボコッ

「(。D。)」

「何驚いてるんですか？私の体、そんなにおかしいですか？」

「いくらなんでも小さすぎない？何歳で何cmよ、あなた。」

「11歳で97cmですけど。」

「ちっちゃ！何をしたら、そうなるのよ。」

「海老とか、サラダとか、食べますけど、そんなに変ですか？私の身体は。」

「うん、おかしい。というか、変。」

「そうですね、まあ、それは置いといて、とりあえず、あなたは選ばれました。これを受け取ってください。」

「そんな怪しい物は、受け取れません。お引き取りを。」

「いや、そんなこと言わずにこれを受け取ってください、さあ！」
「とりあえず、なにに選ばれた説明してほしいのですが。」

「めんどくさいので断っていいですか？」

「駄目です。」

「じゃあ言います。あなたは、12人の中の一人に選ばれました。」
「だから、それは、何の中の一人ですか？」

「数世紀前、12人に呪いをかけられた者達がいきました。その12人は、それぞれ罪を犯していました。ある1人は、大量虐殺を。ある1人は、多くの財宝を盗み。その12人は『咎を制し者』と呼ばれていました。」

「その、12人がどうかしたんですか？」

「その12人は、国王に呪いをかけられました。その呪いを解くには、自分以外の12人の命を消し去ること。しかし、その12人は自分の呪いを未来の子孫へ、移してしまいました。その中の子孫の1人が雅さんです。」

「何で自分の子孫に呪いを受け継がせたんですか。自分の罪を認めないで。」

「その殺しあいに賛成した者もいました。ですが、殺しあいの手段と能力がなかったんです。」

「能力って？」

「刃物を使う者なら、『どんなところにも、刃物を飛ばせる』という能力。毒物を使う者なら『触れた部分に毒を染み込ませ、一時的に機能停止させる。』という能力などがあります。」

「私はなんなんでしょうか。」

「雅さんは、『刺殺の咎を制し者』の子孫なので、『どんなところにも、刃物を飛ばせる能力』ですね。」

「でも、刃物なんか持ってませんよ。」

「自分の頭で刃物を手に持っているイメージをしてください。」

「こっ…？」

雅が、イメージを働かせたとたんに、雅の手が一瞬光り、雅の手の

中に日本刀が現れた。

「雅さん…、あなたは、刃物を投げるとき、日本刀を相手に向かって投げるんですか？」

「投げませんよ！でも、リーチは長いほうがいいかなと思ひまして…。」

「それで、日本刀をイメージしたと…、さっき説明で、投げるって言ったのに。」

「すいませんでした、私が間違えてました。」

「わかればよろしい。じゃあ、雅さん。戦い方は今、教えたので、頑張ってください。あつ、この能力で同じ『咎を制し者』を殺しても、国から特別な許可が出てますが、それ以外の人を殺すと、法的処置を受けますので、気をつけてくださいね。」

「は、はあ。分かりました、気を付けます。」

クリアスは、注意事項を雅に伝えると、土の中に帰っていった。帰る時も土から、帰るのですか。」

こうして、過去の呪いを受け継ぎし、12人の闘いが始まった…。

く序章 完く

第一幕

今、雅は、言われたことを気を付けながら、同じ『咎を制し者』の子孫を探していた。

「殺しあうつて、言ってたけど、何処にいるのよ…。殺す以前の問題じゃない…。せめて、場所ぐらい教えなさいよ。」

「あの、すいません。ちよつといいですか？」

「はい、なんでしょうか。」

「簡単なことです。今から、ちよつと死んでください。」

「意味が分からないって、あなたもしかして…。」

「その通りです、『咎を制し者』の子孫です。俺の毒を喰らって死んでくれ。」

「あなたは、とても親切ですね。でも、嫌です。こつちも死にたくはないので。人を殺すのは、気が引けますが、こつちも殺させてもらいます！」

雅がイメージを働かせ、手に刃物を出した時、目の前の男の周りに、ヘドロのような物が浮いていた。

「気持ち悪っ！なに浮かしてるんですか！」

「なにつて、毒ですけど。」

「もしかして、こつちに投げます？」

「当たり前です！」

男は、浮かした毒を、素手で掴み、雅の方へどんどん投げた。行った。

「うひゃああ！こつちこないでええええー！！！」

雅は、逃げながら手に短剣を出し、毒を撃ち落としていった。毒が当たって落ちた短剣は、音を出して溶けていった。

「うわぁ…、これ、どうやって当てるの？」

「当てる必要はないから、死ね！」

男は、毒の数を一気に増やし、全てを同時に雅に飛ばした。

「投げなくてもいいのなら、なおさら倒せないよ！どうやるの！」
（短剣を投げてでも無駄だったし、毒を防げても近づかないと勝てないし、もう、死ぬ覚悟で、突撃しようかな。）

雅は、自分の周りに短剣を大量に出し、全て投げた。すると、男が飛ばした毒と雅が出した短剣が盛大に吹き飛んだ。

「んなつ！俺の毒が、全部消し去られた！こんなの初めてだ！戦うのも初めてだけど。」

「いらぬ一言が多いですよ。えっと……、誰でしたっけ？」

「そーいや、名乗ってなかったな。まつやま 松山 秀紀ひでのりっていう。まあ、名乗っても意味なかったな。それじ」

「死ねえええええ！」

秀紀が自己紹介をしているときに、雅は、新しく出した短剣で、耳を切り裂いた。

「ぎゃあつあ
あああああ
ああ！」

「ミスった。頭を切ろうとしたのに。」

「どうやら、雅は、自分の能力を忘れて斬りかかったみたいだ。」

「こっちは、引かないと死ぬ！」

秀紀は、自分の毒で煙幕を作り、逃げ出した。

「逃がすわけ無いでしょうが！」

雅は、逃げた秀紀を追いかけて行った。

第一幕 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182z/>

咎人呪殺

2011年12月18日14時00分発行